



階級社会フランスを追及する 『黒いスースを着た男』



監督・脚本／カトリーヌ・コルシニ 脚本／ブノワ・グラファン 音楽／グレゴワール・エツエル 撮影／クレール・マトン 出演／ラファエル・ペルソナーズ クロード・エム・アルタ・ドブロシ・レダ・カチア・アルバン・オマール 2012年フランス国際映画祭「ある視点」部門出品作品 101分 原題／Trois mondes 8月末ヒューマントラストシネマ渋谷ほか全国公開

●深夜の酒場で羽目をはずし騒ぎまわる身なりの良い3人の若者たち。高級車を猛スピードで走らせた挙句、街角で通行人をはねてしまふ。運転していた黒いスースの男（アラン）

は被害者を助けようとするが、同乗した仲間に説得されてその場を逃げ去る。その一部始終を、近くのバルコニーから一人の女性（ジュリエット）が目撃していた。

●アランは自動車販売会社の幹部にまで出世して、10日後に社長の娘との結婚を控える身だった。逃げた後も被害者の容態が気になり、ひそかに病院を訪れてジュリエットに怪しまれる。彼女はアランの後をつけて職場を突きとめ、詰問する。最初は人違いを主張して否定したアランだったが、一転して罪を認める。義憤に駆られて行動したジュリエットも、アランの懇願の真剣さに同情し、とりあえず医療費を払わせるだけにして、警察へは通報しなかった。

●被害者は、当局から「不法滞在者」として扱われているモルドヴァ人難民だった（モルドヴァはウクライナとルーマニアの間に位置する旧ソ連の自治共和国で、89年のソビエト崩壊で独立した後も内紛が絶えず、多くの難民が国外に脱出していっている）。妻のヴエラは夫を病院に運んでくれたジュリエットに感謝するが、彼女が加害者の名前を明かさず、金だけを仲介して渡したことには強い不信感を抱く。

●こうして、原題（『三つの世界』）が示すよう

スペイン映画なら、この先彼らが恐喝や殺人といった犯罪に巻き込まれて行くだろうと思わせる状況設定だが、そとはならない。

●出世主義者だがワルにはなりきれないアランは、許婚者をなだめる一方、金策に奔走したりジュリエットを口説いたり、と支離滅裂な行動をとる。生まれて初めて「魂の試験」に直面した若者の姿である。一方ジュリエットはヴエラたちを助けているつもりだったが、いつの間にかアランに魅かれてヴエラを裏切っている自分に愕然とする。彼女に出来るのは、関わり合いを逃れて以前の恋人のところに戻ることだけ。腰の定まらないインテリらしい選択だった。しかし倫理的に最強の立場にあるヴエラは、鋭く彼らの卑劣さを追及する。ヴエラの夫が死んだ後、病院の医師たちに夫の臓器の提供を要請されると、彼女は言う。「貴方たちは夫が生きている間は滞在許可も仕事も拒否したのに、死んだら内臓を欲しがるのね。いったい内臓一つにつき何ユーロ払ってくれるの？」

●細部にわたって見事に階級社会フランスの現実を描き出したシナリオ、俳優たちの迫力ある演技を引き出した冷静な演出は、特記に値する。アランを演じたラファエル・ペルソナーズはアラン・ドロンの再来との呼び声が高い。そうだが、半世紀前のドロンの出世作『太陽がいっぱい』（ルネ・クレマン監督、1960年）に匹敵する記念すべき作品となつた。

本野義雄（もとの・よしお／本誌編集委員）